

日本下水道新聞

衛生工学シンポジウム開く

北大衛生工学会 MBRなどでセッション

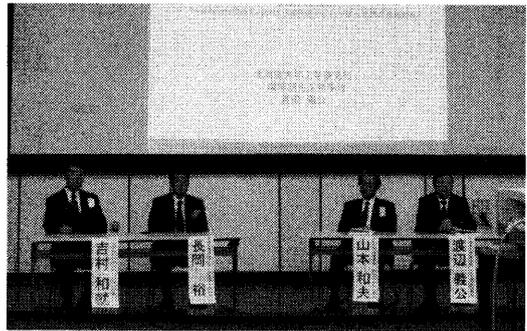
北海道大学衛生工学会(松井佳彦会長)は11月8、9の両日、札幌市内の北大工学部庁舎で衛生工学シンポジウムを行った。同シンポジウムは今回が15回目の開催。10周年を迎えたのを機に内容を検討、北大ならではの特色あるシンポジウムをめざしている。2日間を通じて延べ200人以上が聴講した。

一般セッションは上下水道管理、廃棄物、下水処理環境保全、浄水処理、空気調和・衛生設備の6セッション。企業や大学、自治体などの研究成果が一堂に集結。また今年度は「地球温暖化防止に向けた国、道、市の取り組みと課題」「環境安全研究セ

ンター教授、長岡裕・武蔵工業大学工学部都市工学科教授、吉村和就・グローバルウオータ・ジャパン代表がそれぞれ最新の知見を提

を生み、日本の新たな産業にもつながる、などと述べた。山本教授は現在のMBRの状況を打破するべく、次世代膜分離活性汚泥法による下排水の再生と高度利用について紹介。日本の下水処理場にMBRを普及するためには何が必要かについて説明した。長岡教授は、日本のメーカーが健闘しているにもかかわらず、なぜMBRが普及しないのかについての見解を述べた。吉村氏は欧州におけるMBR標準化の動向と戦略のテーマで、いい製品を作っても規格など仕組み作りで世界に遅れをとっている日本の現状を解説するとともに鼓舞した。

このなかで渡辺教授は、膜の汚れに影響する要素について言及。膜が安く使われるようになればさらにコストの削減という相乗効果



MBRの動向で企画セッション

境安全研究セ